

緑 蔭 図 書

和田陽平

夏の日には木蔭で屈託のない本を読む、これまた一楽ではなからうか。昨年の夏は、私は岩波文庫の千一夜物語を読んだ。

私には子供の頃から何辺となく読み返した本がある。アラビアン・ナイト、森田思軒訳の十五少年、浅野和三郎訳ディケンズのクリスマス・カロール、湖南文山訳の三国志、口木山人そのほか訳の西遊記、それから漱石先生の吾輩は猫である。

私が幼い頃に読んだアラビアン・ナイトは子供向きのものであったが、千一夜物語は元来大人の読み物である。リチャード・バートンの訳は夙に有名なが、これには夥しい註と、まことに風趣豊かな挿絵が入っている。岩波文庫はフランスのマルドリユスの訳である。この物語は凶暴な王様シャーリアールが聡明な妃のシャーザードの千一夜のお話で宥められる仕組みだが、シャーザードはその間に三

人も子供を産んでいるのに——何とそのうち二人は双子ですぞ——シャーリアルは全くそれに気付かなかつた位、間拔けな王様であるが、そんな事はどうでもよろしいのであって、唯一つ一つの物語を築しめば、それでいいのである。ここには近東の香り高い空気がある。夏の夜、遙かにメソポタミアの乾棗や柘榴の實の砂糖漬の味をしのぶのも、また一興であろう。

十五少年は子供の読み物だが、森田思軒の雄渾な訳文によって、大人の鑑賞に耐えるものになった。冒頭の一節を引用してみよう。

「一千八百六十年三月九日の夜、彌天の黒雲は低くたれて海を圧し、閻々濛々咫尺外を辨ずべからざる中にありて、断帆怒濤を掠めつつ東方に飛奔し去る一隻の小船あり。時々閃然として横過する電光のために其の形を照し出ださる。

船は容積百噸に満たざるヨットの一種にして、英国及び米国にて、スクーターと称する兩櫂的な

り。」

私の読んだ森田思軒の翻訳は、この十五少年と、「間一髪」と言う題名で訳されたポオの *The pit and the pendulum* である。訳文は雄勁な漢文調の文語体であった。現在では共に絶版となり、手に入り難いのは残念である。

三国志は勿論正史のそれではなく、小説の方である。岩波文庫には小川環樹先生の立派な現代語訳があるが、私が少年の頃から愛読したのは元禄二年に刊行された湖南の文山の訳したものである。この読み本の文体には一種独特の魅力がある。

「玄德後を屹と見れば、その人身の長八尺、豹頭環眼、燕頷虎鬚、聲雷の如く、勢ひ奔馬に似たり。乃ち立回てその名を問ば、答て曰、某は張飛字は翼徳と云もの也」

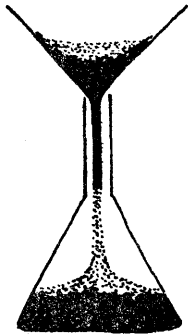
何か張り扇の音が聞えるような感じである。私はこの三国志を何辺読んだか知れない。

西遊記にも太田・鳥居両氏の現代語の完訳がある

が、私が子供の頃から繰り返し読んだのは江戸時代に刊行された口木山人そのほか訳の絵本西遊記である。これもまた文体に特殊の魅力がある。

悟空は「大喝一声するよと見えしが、身の高さ一万丈、頭は泰山に似て、眼は日月の如く、口は恰も血池に等しく、牙は門の扉の如し。鉄棒を執て牛魔王を打つ。牛魔王角を以て是を架止め、兩個半山の裡に在って散々に戦ひければ、寔に山も崩れ海も湧返り、天地も是が為に反覆するかと夥し。」

まことに四大奇書の一、出てくるものはことごと



く化け物ばかりである。難しい漢字にくだけた仮名が振ってある。潑猴、獸子、姑娘、胡說事、罷了罷了、不敢、毛臉和尚、暴燥などなど、これが奇妙な面白い味を添えている。

漱石先生の吾輩は猫であるは、ここに説明するまでもないであろう。

私が少年の頃から、繰り返し読んだのは、こんな本であった。

五七、四、二十六